

日本武尊（やまとたけるのみこと）に関する伝説と熱田神宮

『古事記』や『日本書紀』によると、第12代景行天皇（2世紀頃？）の子、日本武尊（やまとたけるのみこと）は、非常に気性が荒く、粗暴であり、天皇から疎ましがられ、遠征を複数、命じられております。遠征での成果は、1度目は熊襲（くまそ、九州西南部）退治、2度目は出雲（いづも）征伐、3度目は蝦夷（えみし、東国）平定であったそうです。

天皇より、熊襲の追討を命じられます。日本武尊は、伊勢（神宮）に立ち寄り、叔母のヤマトヒメノミコトから頂いた衣などで女装をして熊襲に潜入し、川上梟師（かわかみのたける：日本書記、古事記では、クマソタケル、熊襲の首長）を酒宴の際に、討伐したというものです。熊襲からの帰路、出雲に立ち寄り、当時、この地を支配していたイズモタケルに近づき、打ち解けた後、太刀交換に持ち込みます。この時、太刀に細工をし、イズモタケルを切り殺し、出雲征服を成し遂げます。その後、朝廷に戻って、天皇に報告を行いました。東国遠征を命じられます。

東国遠征の際、再度、伊勢神宮に立ち寄って、三種の神器の一つである天の叢雲の剣（あめのむらくものつるぎ）と袋を拝受されたそうです。東国（日本書紀：駿河（するが）、古事記：相武（さがむ））において、国造（くにのみやつこ）の罾にはめられ、放火されてしまいますが、剣で草を薙（な）ぎ払い、袋に入っていた火打石で向火をつけ、襲ってくる炎を跳ね返し、九死に一生を得ます。以後、この剣を草薙（くさなぎ）の剣と言うようになりました。この後、国造を斬り殺し、先へと進みました。

走水（はしりみず）の海（浦賀水道）では、嵐が起こり船が沈みかけましたが、同船していた妃のオトタチバナヒメが「御子の代わりになって海の中に参ります」と生贄になって神をなだめたため、荒海は静まり、船は何とか房総半島へたどり着きました。

日本武尊はそこからなおも奥へ分け入り、蝦夷（えみし）を平定し、帰路に着きました。足柄（あしがら）の坂に至って坂の神が鹿と化して現れたのを打ち殺し、坂の上に立つと「吾妻はや」と亡きオトタチバナヒメを偲びました。それより足柄より東を「アヅマ」と呼ぶようになりました。

さらに帰路の途中、尾張国造（おわりのくにのみやつこ）家において、その女（むすめ）の宮簀媛の命（みやすひめのみこと）を妃としました。その後、伊吹山の神と対決しに、山に向うのですが、剣を妃である宮簀媛の命の許に留め置きました。この対決は、日本武尊にとって、良い結果ではなく、都に帰る途中に伊勢能褒野（のぼの）で亡くなりました。その後、剣は宮簀媛の命によって熱田の地に奉斎（ほうさい）され、これが熱田神宮のはじまりと伝えられています。